

# 第一五〇話

## 四天王等向後事

『前太平記』下 卷第二十三 七一頁から七四頁より

さて、摂津守源頼光朝臣の逝去の後、長年贖身していた家人たちは、幼子が父母

さても 摂州朝臣逝去の後、 多年恩顧の家人等、 孩児の父母を

を失ったかのように、鳥が翼を削がれた心地で、慟哭しないという者はいない。た

失へるが如く、 鳥の翼をそれたる心地して、 慟哭せずと云ふ者なし。

とえそう（頼光の喪失）であっても、頼国・頼家・頼基のそれぞれが家業を継ぐこ

さりとも、 頼国・頼家・頼基各家業相違なかりしかば、

とに変わりはないので、それぞれ思う通りに分かれて、この三人の家にお仕え

思ひ思ひに相分かって 此三家に参仕したりけり。

したのであった。

四天王の仲間、やはり（頼光への）恋しさのあまりに、三ヶ月の間、毎日廟参

四天王の輩は、 尚も追慕の余りに、 三月の間、 毎日廟参を

を行なって、目の前に頼光がいるかのように畏み敬意の限りを尽くした。しかし酒

企てよ、

如在の礼を尽くしけり。

然るに酒田公時は、

田公時は、剛の者が以後いないことは本意ではないと言って、（以前から）頼光朝

剛者の後なからん事本意なしとて、

摂州朝臣、

臣は心配に思い悩みなさって、「どんな妻でも（いいから）夫婦となれよ」と何度

心苦くるしく思ひあつかひ給ひて、

「何なる妻をも具せよかし」

と、度々、

も命じられたが、公時はまったく承諾せず、いつも人に話したのは、「父が聖人や

仰せられけれ共、

公時敢へて承引せず、

常に人にも語りけるは、

「父聖賢なりとて、

賢人であっても、子も同じように聖賢であるはずではない。ある者は父が才智があ

子も亦聖賢なるべきに非ず。

或ひは父賢才にして

る人で、子が愚か者であることがある。ある者は父が貧しく、子が豊かなこともあ

子愚癡なるあり。

或ひは父貧賤にして

子富貴なるもあり。

る。それゆえ、堯の子に丹朱<sub>(老)</sub>がいて、瞽叟の子に舜<sub>(武)</sub>がいて、禹王といった

されば

堯の子に丹朱あり、

瞽叟の子に舜あり、

禹王と云ひし

優れた君主の子孫に桀王<sub>(參)</sub>という愚王がいる。湯王の子孫であるが紂王<sub>(肆)</sub>は同

聖王の末に、桀王と云ふ悪王あり。

湯王の末なれ共、紂王又無道なり。

じように非道である。今源家のように代々智勇を備える名将でいらっしゃるのは珍

今源家の如く、

代々智勇の名将にて坐しますは希なり。

しい。珍しいことを真似ようとして、子や孫を（期待して）求めることは愚かであ

希なる事学ばんとて、

子孫を求むる事は嗚呼なり。

る。愚かなことをするよりは主君のご生涯に可能な限り忠義を尽くし、御恩を報

嗚呼の事をせんよりは、

君の御生涯随分忠を尽くし、

御恩に報

い、主君が千年生きた後はすべきことがある。今まで一時でも不忠義を思うことも

君千歳の後には行跡ふべき様あり。

今まで仮にも不忠を存ぜず、

なく、少しでも主人の生命を軽んずることもない。しかしながら、このことだけは

少事と雖も上意を軽んずること無し。

但し、

此事計りは

お許してください」と言って、生涯妻とは連れ添わなかった。それだから、この度の

御免を蒙るべし」とて、

一生妻女は具せざりけり。

三ヶ月の満参で、廟所の前で申し上げたのは、「私はいつも范蠡<sup>(伍)</sup>はさぞかし

「我常に范蠡が胸中さこそ

清々しいものだろうと、羨ましく思ったが、今はもう希望は叶い、目的は達成し

冷しかるらんと、

羨ましく思ひしが、

今已に望み足り

功成りぬ。

た。主従の誓いも友との仲も、思いのほどは尽くした。お暇申し上げる、皆さん」

主従の契り朋友の昵、 心の長は尽くしたり。 御暇申す、 人々」

と言って、領地も家財も振り返ることなく、もう一度私宅へ帰るはずもなく、廟所

とて、 所領財宝顧みず、 再び私宅へも帰らばこそ、 廟所寺の

寺の門外からすぐに別れを告げて出て行く。綱・季武・貞光も、「これは酷い酒田

門外より直ぐに別れて出でゝ行く。 「こはけしからぬ酒田殿の

殿の振る舞いだ。誰もがそう思っても、亡き摂津守殿のご遺言も、また三人の御子

形勢や。 誰も斯くこそ思へども、 故守殿の御遺言、 且は三人の御公達

息がこうしていらっしゃる以上は、ただもう留まりなさい」と、声声に叫んだが、

斯くて御座します上は、 混留どまり給へ」と、 声々に呼ばゝりけれ共、

まったく耳にも聞き入れず、早くも行方をくらました。すぐに家人たちを走らせて

敢えて耳にも聞き入れず、 早行方を失ひけり。

追いかけるとめさせた。頼国はたいそう驚きなさり、「どのようにでも止まらせ

ろ」と言って、たくさんの人を出動させて、その行方を探させたが、伊豆国足柄山

で、すぐにその消息を見失ったので、谷や皆に分かれて、木や草の陰まで探した

が、とうとう足跡も見せなかった。

また、碓井貞光は、公時と別れ、私宅に帰り、悩むことなく急死した。以前季武

又碓井貞光は、公時に別れ私宅に帰り、悩む事も無く頓死せり。先年季武が

の妹と連れ添って一子を儲けたが、長保年中に流行病にかかって九歳で早逝した。

妹を相具して一子を儲けたりしが、長保年中に時疫に遇ふて、九歳にて早世しぬ。

その後後継もなかった。過ぎ去った天延三年、そこでやっと頼光朝臣にお仕えし

其後嗣子も無かりけり。去んぬる天延三年、始めて頼光朝臣に参仕して

て、四天王と称されて、今年治安元年まで片時の間もお側を離れず、まるで姿につ

四天王と称ぜられ、今年治安元年まで、片時の間も御身を離れず、恰も形に

いていく影のように、生前に忠孝のすべてを尽くし、没後供養の廟参、三ヶ月満ち

随ふ影の如く、生前の忠功既に尽くし、没後教養の廟参、三月満参して、

て、その日に当たって死んだ、（主従の）契りの深さこそ尊いものだ。勘解由判官

其日に中って死したりし、契りの程こそ有り難けれ。

(陸) ト部季武は、治安二年の春に、七十三歳で病死した。一子武俊は、どのように

ト部勘解由判官季武は、治安一一年の春、七十三歳にて病死せり。一子武俊は、如何

思ったのだろうか、頼光朝臣の存命の時から、頼信朝臣に仕えた。渡部綱は、過ぎ

思ひけん、摂州朝臣存生の時より頼信朝臣に仕へけり。渡部綱は、

去った頃に、内舎人 (漆) に任命されて、「源内」と称した。摂津国西畦野 (捌) と言

去んぬる比、内舎人に補せられて、源内と呼びけり。摂津国西畦野と云ふ所に

うところに隠居して、四、五年を経て、万寿二年の春に死去したのだった。享年は

退隠して、四五箇年を歴て、万寿二年の春、死去しけり。行年

七十三歳であった。その子の源次久は、頼国朝臣に仕えた。

七十三にてぞ有りける。其子源氏久は頼国朝臣に仕へけり。

---

## 注釈

※壹・堯の子に丹朱……堯は中国の古代の伝説上の帝王。理想的な王とされた。丹朱はその堯の子で、驩兜とも言い、悪神とされる。

※貳・瞽叟の子に舜……舜は中国の伝説上の聖天子。堯と同じく理想的な王とされる。瞽叟は舜の父で、愚かで道理に暗い人物とされる。

※参・禹王といった優れた君主の子孫に桀王……禹は古代中国夏王朝の始祖。桀は夏王朝最後の王で、暴虐無道の人物とされ殷の湯王に滅ぼされる。

※肆・湯王の子孫であるが紂王……湯王は殷王朝の創始者。紂王は殷王朝最後の王で、桀と並んで悪王とされる。

※伍・范蠡……中国春秋時代の越の功臣。越王勾践に仕え、敵を討ち主君の恥辱を雪いだ故事がある。ここでは公時が「主君のために働くことを羨ましい」とする表現である。

※陸・勘解由判官……国司交代のとき、前任者から後任者への事務引き継ぎを証明する文書を審査した勘解由使の三等官。

※漆・内舎人……宮中で帯刀し、警備・雑役・御幸の警護にあたる職。

※捌・摂津国西畦野……現兵庫県川西市の地名。

---

頼光の最期に続き、頼光四天王の最期のお話です。

公時は、頼光と出会い、「公に仕える時」から「公時」と名づけられた人でした。古語における「公」には色々な意味がありますが、彼にとっての「公」は朝廷ではなく、源頼光という「主君」であり、頼光以外に仕えることはできなかったのだと思います。彼が子を成さない理由は、「自分の子が役に立つか分からないのに期待をするのは愚かである」と言う言い分ですが、頼光の後継となる血への攻撃的な感情を秘めているようにも思え、彼にとって頼光以外の主君がないことが強調されているように思います。

そして、彼が頼光に告げた「すべきことがある」という願望と、足柄山で消息を掴めなくなったというピースがあまりにも意味深で、彼が竜の子であるという背景も考えると、本作の彼はやはり神秘的なものを感じてしまいます。頼光に忠誠を誓い、頼光を支え、頼光のために生き、頼光が目的だった、我儘な永遠の少年が彼のイメージな気がします。網たちからは責められてしまいましたが、本来の目的通りの生き方をした彼の人生は、美しいと思いました。

それに代わって貞光は、と私は思ってしまう…この最期は「頓死（急死）」と表現されていますが、おそらく実態は「殉死」もしくは「自殺」です。作者藤元に、なんてひどい最期を貞光に用意したのだと、この話を訳す前から思っていました。貞光は本来、六歳で父母を失い、ただ一人で生き、信濃に配流された氏族の高名のため、主君を求めて山を出た苦労人でした。彼の生きる目的は源頼光ではなかったのです。

貞光は、疑いようもなく作者藤元にとっての四天王の「最推し」です。一人で生きた彼に褒美のように素晴らしい主君と主君から名前を与えられるという喜びを用意し、怪力で悪党を成敗し、主君頼光の郎等であることを傲慢にも思える程に誇る。そんな作者の願望を凝縮し、源頼光への愛情を代弁させたような存在が本作の碓井貞光です。作者はそんな愛情を注いだ勇士の最期を、きっと最初から考えていたのだと思います。「最もカッコイイ死に方」を、「最も愛した勇士」にさせたかったのだと思います。

江戸時代の人間の価値観に正面から文句をつけることはできませんが、それでも、この作者は敬愛する源頼光が郎等にそんな死に方をされて喜ぶと思っていたのでしょうか。あれだけ優しく、郎等を慈しむ人として描いた源頼光がそんな死に方を称賛すると思っていたのでしょうか。

季武の妹を妻に迎えたという描写があることにも残酷さを感じます。季武との深い絆の見える描写であると同時に、頼光以外にも生きる目的はあったかもしれないという描写なのに、妻との愛の結晶を失い、結局は天涯孤独の身となってしまったことが悲しくてならないです。

貞光がこの最期を迎えることに関しては、作中の描写の数々から違和感はありません。それでも私は貞光の最期が悲しくてたまりません。「源頼光」を誇った彼には、最期まで誇らしくあってほしかったとってしまいます。

季武はつつましやかな描写でしたが、子の武俊と頼信の関係に触れられていたのにドラマを感じました。その後武俊は作中で頼信のために戦うお話があります。季武は父も満仲に仕え、その子もまた源氏に仕えていることにとっても意味を感じます。

季武の最期の描写はとても簡素ですが、頼光の死から半年後、公時の失踪と貞光の頓死から三カ月前後のこととなります。病死と言及されていたのも考えると、主君・仲間・義弟との別れが重なり、心労もかさなってい

たのでしょうか。季武は頼光主従の中で最も年上です。情けなく、人間臭い人として作中では描かれてきましたが、人間味あふれる年長者として仲間たちを見守っているような人だったのだと思います。

綱は、公時同様目的を果たした人生だったのだと思います。彼も父の血を高名するため、叔母に背負われ武蔵から摂津へと上った人です。満仲に見いだされ、頼光の側に控え、友と出会い、神秘を掻き分け、鬼魅を征し、敵を倒すという、頼光の人生に現れた人物の中でも随一の勇者として描かれました。最後には内舎人にまでなり、主君が最後に治めた土地に隠居するという人生は、とても美しいと思います。

彼の子久が頼国に仕えたというのも、「ああ、綱の血は、満仲と頼光の血を永遠に支えるのだな」と胸が熱くなります。

ただ、主君と仲間と先立たれた二年間、彼は寂しく仲間と過ごした摂津の地で暮らしたのだと思うと切なくなります。それでも、彼は「朝家の守護」のその「守護」として見事に生きたことを誇りに、仲間たちとの温かい思い出を胸に最期まで生きたのだと思います。

「綱は美男である」という俗説は非常に有名ですが、やはり綱は美しい男なのだと思います。

誇らしく美しい人生を生きた男なのだと思います。

長々と語りましたが、私が『前太平記』を訳すに至った目的はこれで達成しました。

「酒呑童子を倒した源頼光の人生を知りたい」。

私の目的は達成されました。

「『前太平記』における源頼光の人生」は、これにて完訳です。

これ以降もちろん全編の現代語訳を目指します。

しかし、一つの節目として、目的を達成した旨を記します。彼らと向き合った日々はとても楽しく、幸せなものでした。

これからこの訳が、酒呑童子伝説や源頼光と四天王について知りたいと思った人の探究心の一助となることを願っています。

ここまで「源頼光の人生」を見守ってくださった方、この活動を応援してくださった方に心から感謝申し上げます。

本作における源頼光の物語は、これにて完結です。

感想・指摘・叱咤激励、随時受け付けております。Twitter やメール等でご連絡ください m(\_\_)m

公開：2021/7/28  
海熊童子